「余裕」　　2020 年 5 月 29 日　渡戸千穂

コロナ禍の中で使命感の下に善戦した医療機関には、ぎりぎりまで減らされたICUと医療従事者の劣悪な環境と相まって医療資源の余裕がなく、いつ飽和してもおかしくなかった。

「世界の富は少数の富裕層に集中する。上位1%が世界の富の半分を所有し、大富豪 26 人が貧困層 38 億人分と同様の資産を保有するという。だが、この大富豪の中に日本人はいない。日本にも資産約 1 億円以上の富裕層は多いが、約 50 億円超の超富裕層となると米の 8 万人超、中国の 2 万人に対し世界 8 位の 3 千人」(2020 年 5 月 29 日朝日新聞)であり、財務省の「法人企業統計」によると、2018 年度の内部留保(利益剰余金)が 7 年連続で過去最大を更新し、463 兆 1308 億円となり、7 年間のアベノミクスの下で企業がお金をため込んでいる。一方で、かつかつの環境で暮らしている人々に求められた、補償なき自粛の下では、人々には心もお金も余裕がなく、自粛警察に走り、自死し、強盗やキャシュカード詐取など特殊詐欺犯罪が増えた。

日雇労働者及び2か月以内の期間を定めて使用される労働者は、「日雇特例被保険者」として、保険料を事業主が多く払う労使折半により健康保険に入れるが、社会保険料の支払いを「不法に」事業主が嫌がるために、「不当に」国民健康保険に入らさられて国民健康保険料として全額負担することを余儀なくされている。厚生労働省の「医療保険に関する基礎資料(年次報告)」によると、平成 30 年 3 月現在、医療保険制度の加入者数のうち日雇特例被保険者は0．01%。対して、総務省の「平成 30 年労働力調査」によると、雇用者5927万人のうち、1 か月未満の有期契約者は0．22%(13万人)、1か月以上 3 か月未満の有期契約者は1．72%(102万人)で、1 か月未満の有期契約者だけを見ても、日雇特例被保険者割合の0．01%を上回っている。「日雇特例被保険者」として健康保険に加入できる、日雇労働者及び2か月以内の期間を定めて使用される労働者はこんなに少なくはない筈だ。コロナ禍に対応するには健康保険が必須であるのに、もともと賃金が低い非正規労働者は健康保険にかける費用さえも事業主から拒まれ余裕をなくしている。

業務繁忙期に国から仕事が降ってきて逃げることもできず、時間外労働月80時間越えで頭がしびれてもうろうとしてかろうじて働く、心も時間も体力も余裕がない常勤職員の私の横で、「頭がしびれてるんだって。この職場を仕切っているのは私達だから。」と言う、心もお金も余裕がない非常勤職員。官製ワーキングプアという構造的な問題が、誰彼の余裕をも奪い、誰彼をも追い詰める。

「忙しい人は時間の余裕がない。きまじめな人や悲しんでいる人は、笑う余裕がない。病気の人は元気に動き回る余裕がない。そう考えていると、余裕って大事な言葉ですね。余り(あまり)が裕か(ゆたか)にある」(養老孟司)。「強いストレスを受けている状態で自分の心に入り込んでしまうと、人間は冷静な判断ができない。認知行動療法の考え方です。自分の不安やストレスに気づいたら、一息入れることが大切です」(大野裕)。「やさしさはゆとりがないと生まれない」(上野千鶴子)。知識人はこう唱える。

「衣食足りて礼節を知る」「恒産なくして恒心なし」「貧すれば鈍する」という格言を、このコロナ禍で思い出すことしきりだ。

あそびのないハンドルは怖い。ニュートラルのないクラッチは困る。

人の余裕を必要以上に奪うことでしか、人は生存できないのか。人を搾取することでしか、経済は回らないのか。共生社会(ダイバーシティと言うのかもしれないが、私はこの言葉がしっくりくる。)を目指すことは幻想なのか。

人は、こころにも時間にもお金にも、余裕が必要だ。人にも社会にも余裕が必要だ。余裕は、人の、社会の、公共財だ。余裕を過大に占有したり占拠したりすることは、人や社会の劣化をもたらす。高度に分業化した社会にて、人は誰一人として一人では生きられない。余裕を持ちあえる、人による社会を目指したい。